LIBRA SQUARE
リブラ・スクエア

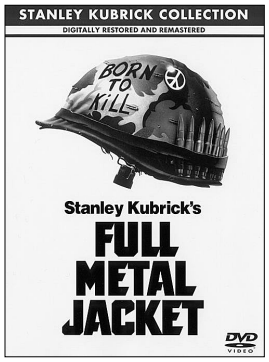
cinema

心に残る映画

『フルメタル・ジャケット』

1987年／アメリカ／スタンリー・キューブリック監督作品

戦争による人間性の崩壊，怜悧な視点で



『フルメタル・ジャケット』
DVD
発売元：ワーナー・ホーム・ビデオ
価　格：1,500円（税込）《期間限定》
品　番：HKP21154

「フルメタル・ジャケット」は，「2001年宇宙の旅」等で有名なスタンリー・キューブリック監督のベトナム戦争を舞台にした作品である。

前半は，海兵隊の新兵である若者達が，鬼教官の下で，殺人マシーンとなるべく訓練を受けるストーリーである。訓練という通常の戦争映画ではわずかしか流れない部分をキューブリック監督は約40分にもわたり描いた。

新兵のレナードは，太った体型などから，教官から眼の敵にされ徹底的にしごかれる。同じ新兵のジョーカーはそんなレナードを心配する。しかし，8週間の訓練の中で，レナードの目の色は段々と変わっていき，前半のラストシーンで，レナードは完全に人間性を崩壊させてしまう。

人間性を失っていくレナード，それを見るジョーカー，卑猥な言葉を連発して新兵を訓練する教官といった登場人物が，みな強烈な個性を発揮して訓練の様子を描いている。特に教官は，実際の元軍曹であり，その演技はすさまじいものがある。

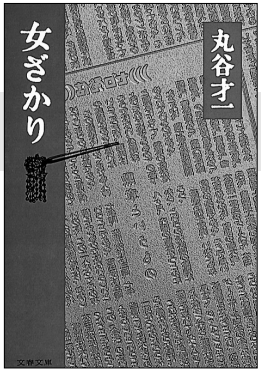
後半は，それまで報道班として比較的安全な場所にいたジョーカーが，前線に行くことを命じられ，前線の現実を見せられるストーリーとなっている。突然の敵来襲に翻弄されるジョーカー達，インタビューのカメラに向かって戦争という非日常を淡々と話す前線部隊の隊員達，たった1人で小隊を翻弄するベトナム人の少女，そこでは戦争の中で誰もが，人間性を失っていく。後半には，前半ほどのインパクトはないが，最後に流れる「ミッキーマウス・マーチ」はインパクトが強い。

この映画には，戦争映画によく描かれる感動シーンや典型的な戦争批判シーンというものはない。しかし，戦争から生じる人間とその変化・崩壊の様子を怜悧にありありと描いており，ときに戦争という舞台すらエンターテイメントとしてしまったかのように見受けられる他の戦争映画よりも印象的である。

この映画の受けとめ方には個人差が出るため，万人に勧めることができるかという問いに対しては，それに当てはまらないと私は思う。ただ，怜悧かつ辛辣な視点で，戦争の中で生き人間性を失わせる人間達を強烈に描いたこの映画は，戦争を知らない私がいうことではないかもしれないが，戦争をリアルなものとして，その恐ろしさを考え，そして心に刻むことができるものであると思う。戦争映画の傑作のひとつと評価されているが，まさにそのとおりと感じる。

（会員　塩原 学）

book 最近，おもしろかった本



『女ざかり』

丸谷才一 著　文春文庫　550円（税込）

無償であるはずの「贈りもの」巡る人間模様

丸谷才一という作家に対する私の認識は，最近まで「おじさんの読むもの」（父の本棚にあったせいである）というくらいのものだったが，博識な人で，エッセイがとてもおもしろいことは知っていたので，小説も読んでみよう，とふと手に取ったのがこの本であった。

あらすじは，新聞社で論説委員をしている主人公の女性が，書いたコラムがもとで，政府から圧力がかって論説委員を追われそうになり，周りの人々の協力を得て対抗するというもので，個性的な登場人物たちがユーモラスに描かれている。

また，文章の，論説部分や場面ごとの使い分けも興味深い。出だしにまず，記事を書けない新聞記者の書いた論説が登場する。下手だという設定だが，確かに，素人目に見ても下手である。このような文章も書けるなんて，作家というものはすごいものだと驚く。

このように，いくつも見どころのある小説であるが，私は，この小説のおもしろさは，一貫して流れる「贈与」というテーマの扱いにあると感じた。

政治家に対する賄賂，政府からの補助金，男女間の手切れ金等，いろいろな場面で「贈りもの」が問題となる。そして，その見返りも。贈与が無償であることは，民法549条に書いてあることだが，見返りを期待せずにいられない人間の性，もらいっぱなしでは居心地が悪くてお返しをしてしまう心理などは，誰でも身に覚えがあるところであろう。

そのような，無償であるはずの「贈りもの」を巡って繰り広げられる人間模様や，それに対する登場人物の意見は様々であり，考えさせられた。

私の一番好きなくだりは，主人公のおばが，神様へのお供え物と自分が恋人から受け取った手切れ金を比べて考察する場面である。恋人から別れて欲しいと不躾にお金を贈られて彼女は傷つくが，お供え物を一方的に押しつけられる神様も同じようなものではないか，と彼女は考え，贈る側にとっては他にどうする手だてもないのだからそれでよしとしなければ，と思う。

贈りものというのは，無償であるのに，いや，無償だからこそ，贈る方も贈られる方もいろいろなことを考えて大変である，ということを改めて感じた1冊であった。

（会員　太田 美和）